

李家
典豐



書下し長篇アドベンチャー・ロマン

白夜の吊鐘

書下し長篇アドベンチャー・ロマン

白夜の吊鐘

李家豊



徳間書店

TOKUMA NOVEL



TOKUMA NOVELS

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇〇
電話四三三・六二三一 振替東京四四三九二

李家 豊

白夜の吊鐘

カバー絵・本文イラスト 山田 雄

デザイン／矢島高光

Yutaka Rinoie ©1981

落丁・乱丁はおとりかえいたしません

〈編集担当 金城孝吉〉

白
夜
の
弔
鐘
—
目
次

序章

モスクワ郊外の夕べ

9

第一章

飼うものの飼われるもの

17

第二章

誓約

38

第三章

森の館

62

第四章

パリのロシア人

89

第五章

疑惑と背信

106

第六章 クリームヒルトの葬送 135

第七章 希望せざる滞在 159

第八章 脱出行 187

第九章 さよならは言わない 207

終章 火曜日の正午前 234

序章 モスクワ郊外の夕べ

「サーシャ、あまり動きまわらないでちょうだい。母さんは自動車クルマを運転してゐるんだから、おとなしくしてて」

亜麻色の頭髪をスカーフに包んだエカテリーナ・マリノヴァは、助手席で動きまわる息子をそなたしなめた。

「だって母さん、車外そとの景色が見えなくてつまらないんだもの」

「アレクサンドル・ウラジミロヴィッチ・マリノフ、成人おとなに注意されたら、はいと返事するものですよ」

「はい、母さん」

「よろしい」

エカテリーナは微笑した。

八歳になる息子の心情はよく解る。六月半ば、本来ならアトクリトエ街道の左右には、エメラルド色に輝

き渡る「ロシアの森」が広がっている筈である。しかしこの日、薄青い夕靄は地上の全てを冷たく湿ったヴェールに包みこんでいた。車外の風景が見えれば、サーシャの無聊も多少は慰められるのだろうが……。

「モスクワまであとどのくらい？」

「三十分ぐらしかしらね。この靄だから注意して運転しないと。通常時いつもだともう市街に入ってる頃だけど」

サーシャは母親譲りの亜麻色の頭髪を手で掻き上げながら、窓外を流れ去る靄を見やった。

「父さんも来ればよかったのにね」

「父さんは忙しいのよ」

「日曜なのになあ」

「父さんが帰宅かえったら、今日描いたスケッチを見せてあげるといいわ。賞めてくれるわよ」

「そうだね」

サーシャは傍に置いてあったスケッチ・ブックを取り上げると胸に抱きしめた。日本へ海外出張した父親が買って来てくれた、紙質の良いスケッチ・ブックで、表紙には「フジムスメ」とか称いう日本人形の綺麗な色彩写真が飾られている。目下のところ、これが少年の

最大最高の宝物だった。

「僕、今度の校内大会でもきつと一等賞を取るからね」

「ええ、ぜひそうしてちょうだい」

「ユーリーが僕のこと悪く言うんだ。そんないいスケッチ・ブック持ってたなら誰だって上手な絵が描けるって。でも、そんなことないよね」

「もちろんよ。そんなつまらない悪口を気にしてるの、サーシャは」

「気になんかしてないよ」

「そうよ、気にしてはだめ。聞き流してしまうこと。いいわね」

それは彼女自身に言い聞かせたことでもあった。三週間ほど前に、久しぶりに逢った姉のソフィアに言われたことが記憶に甦る。姉は言ったのだ——そりゃあんたはいい御身分よ、カチューシャ。モスクワの市内には住めるし、外貨専門店^{ベリイ・スぺツィヤルニイ}で買物もできる。夏になつてソチの海岸に行けば、滞在客を追い出してでもあんたたちの為に保養所を空けてくれる。でもいい気にならないことね。あんた自身が偉い訳じゃない、あんた

の旦那に甲斐性があつてのことなんだから……。

ソフィアの言は正しい。エカテリーナの今日の幸福は、中央官庁の有能な官吏である夫に負うものだ。承知していたつもりでも、姉から見れば特権意識が鼻につくのもしれなかった。もっともソフィアには嫉妬もあつたに相違ない。子供の頃はソフィアのほうが美人になるだろうと言われていたのだから。

（でもソフィア、あなたが捕まえた男性は水力発電所の下級技師だった。しかも勤務成績不良で、モスクワの近郊からウラルの東側へ左遷されてしまった。そんな男性を伴侶に選んだのはあなた自身の不明よ。わたしだって少しは偉かったと思うわ。男性を見る目はわたしのほうが上だったってことを、現実が証明しているもの……）

社会的地位の高い、優しい夫がいる。息子のサーシャは絵が得意で、将来は大学都市の建物に壁画を描くような画家になるかもしれない。今日も郊外の運河にスケッチに行ったのだが、サーシャが小さな手をクレヨンで汚しながら描き上げた絵は、夏季休暇に入る前の校内大会で、きつと一等賞を取るだろう。エカテリ

ーナは家族に対して何の不満もなかった。

彼女は自分自身にも満足していた。三十歳を過ぎはしたが、彼女の肢体はまだ充分に瑞々しく、すらりと引き締まっている。二歳上のソフィアが乳脂肪の摂り過ぎで少女時代の倍も体重が増加しているのに比べると、造形美の極致といつていいほどだ。サーシャ御自慢の美しい母親だった。

「来月二十一日に行なわれるベーリング海峡ダムの完工式典には、わがソビエト社会主義共和国連邦より次の政府首脳が出席することに決定しました……」

サーシャがラジオのスイッチを入れたのだろう、明瞭だが平板なアナウンサーの声が車内に響いた。

「……クズネツフ最高会議幹部会議長兼党書記長、ロマノフスキー閣僚会議議長、ナビコフ科学アカデミー総裁、アリストフ外務大臣……」

「少し音を小さくして、サーシャ」

「はい、母さん」

「……一方、アメリカ合衆国よりは、ホップス大統領、マクローリー國務長官、スターンズ首席補佐官などが出席する予定です。また、これは二大国間の恒久的な

友好関係の樹立を記念する歴史的な偉業であるとして、国際連合のオリオール事務総長も式典出席の意向を明らかにしました。国際平和の建設と科学技術の発展に貢献しようとの、わがソ連邦の熱意は……」

「ベーリング海峡ダムが、とうとうできるのね」

「まだうるさい？ 母さん」

「いいわ、消さなくても。早いものだなあと思ったのよ。ダムが造られ始めたとき、あなたはまだ生まれたばかりだったわ」

太い光の箭に切り裂かれる夕靄を見つめながらエカテリーナは話し始めた。

「それは小さな赤ちゃんでね、丈夫に育ってくれるかどうか、父さんは随分心配したのよ。看護婦さんにしつこく尋ねて叱られてたわ」

「父さんが叱られたの、へえ」

少年は愉快がった。

「どんな風に叱られたの？」

「心配ないと何度も言ってるのに信用してくれないのか、専門家に任せておきなさい、現在あなたにできることは静かに坐って私たちの邪魔をしないことだ——

ってね。真実^{ほんとう}に、父さんはうろろ歩きまわるだけで何もできなかったのよ。お医者さんや看護婦さんにぶつかっては謝^{あやま}ってたわ」

「父さん、子供みたいだ」

「そうね、子供みたいね」

幸福な母子が笑いあったとき、ラジオから流れ出る音が変わった。ニュースが終わって、軽音楽の番組が始まったのだ。耳を傾けたサーシャが手を叩いた。

「僕、この曲知ってるよ。『白樺は野に立てり』だ」

「古いのをやってるのね」

「ねえ、母さん、他の自動車^{クルマ}が全然通らないね」

「この霧ですものね」

「ペーリング海峡ダムができれば、気候はずっとよくなるでしょう」

「そうよ」

「こんな嫌な霧もなくなるかしら？」

「きつとなくなるわよ」

ペーリング海峡にダムを造り、北極海の冷水を太平洋に放出すると、北極海の水温が上がる。北極海が生まみ出す寒気は著しく勢力を減じ、北方からソ連邦を侵

略する冬將軍は老衰して死滅してしまふ。ソ連邦の内陸部も黒海沿岸のように暖かくなるだろう——科学アカデミーがそう言っている。ソ連邦科学アカデミーが言うのだから、まちがいない。冬の雪も当然減るだろう。霧？ 霧はどうだったろうか……多分なくなるに決まっている。何もかも、現在^{いま}より悪くなりっこない。合衆国^{アメリカ}との仲も、第三次世界大戦勃発寸前から共同でペーリング海峡ダムを建設するまでに改善されたのだし、気候が暖かくなれば農作物の収穫も増え、冬でも市場に新鮮な野菜が並ぶようになるだろう。そう、何もかもいっそうよくなつてゆく。おや、いつのまに曲が変わつたのだらう、これは『モスクワ郊外の夕べ』だ。夫が好きな、彼女自身も好きな曲……。

「母さん！」

サーシャが悲鳴をあげた。

それはまったく突然に彼らの眼前に出現したのだった。

厚い霧の壁面を画然と区切る、黒い方形の物体。それが巨大な箱型トラックの輪郭だと解つたとき、彼女の手は反射的にハンドルを大きく右に切っていた。タ

イヤが鋭い叫びをあげ、双つの車体は互いに側面を強烈に擦過しあつた。

明らかに不公平な勝負だった。車重に差がありすぎたのだ。サーシャと母親の乗った小さな自動車は、見えざる巨人が掌を立てでもしたかのように、横倒しになつて路面を滑つてゆき、路傍のトウヒの樹に勢いよく衝突して停まつた。

トラックの運転席の扉が開いて、顔面を蒼白にした若い男が飛び降りた。どこかの工場の作業員らしい服を着たその若者は、おお、何てことだ、と低く呻くと、サーシャたちの自動車に向かつて走り出そうとした。

「停まれ！ 何をする気だ！」

烈しい制止の声に背を打たれた若者は、振り返つて、運転席から身を乗り出した逞しい中年の男を見た。

「だって、助けなきゃ……」

「無駄だ。もう死んでる」

男の声は冷徹だった。

「生きてるかもしれないじゃないか」

「たとえ生きていても、助けている時間的余裕はない。事故のことはすぐ知れる。民警がやってくる

ぞ。民警に調べられてもいいのか」

若者は沈黙したが、見捨てる決心がつきかねたように再びサーシャたちの自動車に視線を投げ、そしてそのまま立ち竦んだ。

横倒しになつたままの自動車の運転席の扉が開いたのだ。天に向かつて。そこから女の上半身が現われた。被っていたスカーフをむしり取ると、乱れた亜麻色の頭髮が露わになった。ぶつけて截つたのであろう、額に開いた傷口から血が流れ出して半面を染めていたが、卵型の白い美しい顔だった。女は大きく息を吐くと、若者に視線を投げ、弱々しいが明確な口調で言った。

「助けて……サーシャが、息子が下にいるの」

「……………」

「お願い、助けて、血だらけになつてゐるの、助けて病院に伴れて行つて」

若者は狼狽して同伴者の顔を見た。無言の質問に対する無言の返答は、厳しい拒否の表情だった。なおも躊躇する若者を、男はトラックの扉を平手で叩いてうながした。

「でも、コーリヤ、負傷者を放つては……」

若者の抗議の声は、「ばか！」という怒声に掻き消された。若者は致命的な失策を犯したことを悟った。同伴者の名を人前で出してしまったのだ。

「早く乗れ、この無能者！」

罵られた若者は反駁する元氣も喪って、小走りでトラックに駆け寄った。

「待って！」

女の声だった。憤りに満ちた蔦色の瞳が二人の男を見据えた。この男たちは冷酷にも、卑劣にも、負傷した彼女と息子を放置して逃げ出そうとしているのだ。自分はいい、でもサーシャが見捨てられるのを黙認はできない。

エカテリーナは夫に助力を求めた。彼女にとって夫はいつも頼もしい守護神だった。

「わたしの夫は国家保安委員会の職員よ！」

彼女は叫んだ。

効果は驚くべきものだった。二人の男は雷電に打たれたように動作を停止した。年長の男の顔色は若い同伴者のそれと同じ色に変わっていた。

「KGBの？」

若者が呻いた。声まで蒼白んだようだった。

「そうよ、だから助けて下さったら悪いようにはしないわ。事故の責任だって、きっと軽くしてさしあげられてよ」

「……………」

「お願い！ 急いでちょうだい」

エカテリーナにとって、国家保安委員会はまず何よりも夫の職場だった。それも誇るべき職場なのだ。国营TVの長篇ドラマに登場するKGBの工作員は、世界各国を股にかけて、ナチスの残党や合衆国中央情報部のような悪虐無道の組織と対決し、虐げられた人民の権利を守るため苛烈な闘争を続けている。たまたま夫の帰宅が早くて、父子が並んでその番組を見ることがある。英雄的な主人公の活躍に熱狂するサーシャの傍で、父親は半分苦笑を浮かべており、夕食を運んできた彼女に向かって、あんな華美な仕事じゃないよ、と言うのだった。それくらいは彼女も知っている。しかし三十代で、暖房と給湯の設備がととのった四部屋の広いアパートに住めるのも、国産だが自動車を持てるのも、商店や保養施設が何かと便宜を図ってくれる

のも、夫が重要な国家機関に勤務しているおかげだった。そして現在、卑劣な男たちの遁走を阻んだのも。

エカテリーナの世界は狭かった。彼女とまったく異なる目でKGBを見ている人々の存在を彼女は知らなかった。少なくともソ連邦の国民はみんなKGBを信頼し、その職員を尊敬していると思っていた。

年長の男が大腿に近づいて来た。何か言いかける若者を、分厚い肩ではね飛ばすようにしてエカテリーナの眼前に立つと、作業服の内ポケットに手を突っこんだ。再び現われたとき、その手は黒く光る異形の金属物を握んでいた。

エカテリーナの思考回路のどこかが焼き切れた。彼女は呆然として、声もなく、自分を狙って突き出された拳銃の冷たく開いた口を見つめた。男の腕が緩い弧を描き、彼女は左耳の上に硬い感触を覚えた。

銃声は鈍く、くぐもっていた。エカテリーナ・マリノヴァの亜麻色の頭部に一点、赤黒い穴が穿たれた。彼女が頭を落とすと、長い豊かな髪が滝となって地上へと流れ、それを伝わった一節の血が路面に滴った。

フロント・ガラスは白い蜘蛛の巣状になって車内を

見ることはできない。男はエカテリーナの身体を片手で押しのけるようにして、伸び上がりながら車内を覗きこんだ。車内灯は壊れて消えており、男はペンシル型の懐中電燈で車内に細い光を送りこんだ。血に汚れた小さな顔、力なく目を閉じた少年の顔を男は見た。胸にノートのようなものを抱えていたが、よくは見えなかった。死んでいることは確実なように思われた。無事だったラジオが『モスクワ郊外の夕べ』の最後の一節を流していた。

男は拳銃と懐中電燈を服にしまうと、若者に歩み寄って、肩と胸の境界の辺りを叩いた。

「行くぞ」

若者は半歩よろめいた。そして抗議とも悔恨ともつかない語調で言った。

「何も殺すことはなかった」

「いや、殺す以外なかった」

男の声は強かった。

「それともKGBに同志を売るべきだったと君は言うのか、ワーニャ」

「——解ったよ」

「では急げ。どうもここまでは運が好すぎた。これからは悪くなる一方だろう。長居は無用だ」

二人の男はトラックに乗りこんだ。

トラックの音が遠ざかると、夕闇と靄の中に、横倒しのままの自動車が残された。暗い車内に、現在^いは『ともしび』のメロディが低く流れていた。

息絶えた母親の足下で、サーシャは目を閉じたままうずくまっていた。白っぽくなった唇が微かに動いて小さな息が洩れたが、声にはならなかった。

今度は細い指が動いた。緩慢に、だが明確なひとつの意思を持って、指はスケッチ・ブックの裏表紙の上を動いていた。

見ている者は誰もいなかった。